夕焼け通信1258号　2020.5.4

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）４

木幡智恵美

インフルエンザ（4）

ぽっかり抜けた時間も、病院通いが始まり出すと、また新たな生活リズムができていった。息子を送り出した後、家事をしたり、点訳をしたり。昼前から義母が入院する病院まで歩いて行き、義母は病院食、私は持参したおにぎりで一緒に昼食を摂る。お茶を汲んだり、入れ歯を洗ったり、座らせて外の景色を眺めながら話したりして二時間くらい過ごして帰る。そうして過ごすうち、ずっと続いていた微熱が下がりだし、欲しがらなかった食事も少しずつ摂れるようになっていった。

幸いだったのは、ちょうどその頃、医療専門学校の生徒さんが実習に来ていて、そのうちの一人が義母の担当になったことだ。バンビちゃんと私が勝手に名付けた若い看護師の卵が、度々やってきては義母に声を掛けたり、検温や体拭きの体験をしたりして、義母の気を紛らせてくれた。そのうえ、指導教官が、義母の通うデイサービスの介護職員さんに雰囲気が似ていたのだ。顔を出される度に、「あら、Hさん」と言うので、「私はTですよ」とT教官は答えていたが、そのうち、「Hさんでいいですよ」と微笑まれるようになった。

入院生活も一週間が経ち、食事も残す量が減り、家から持ってきた杖で少し歩けるようになってきた頃だ。「明日、帰るか」と言われる。「いや、いや、まだ先生から退院って言われませんよ」と答えると、顔を曇らせる。やはり、家がいいようだ。「ほら、あそこ、寛大たちがいる保育所、見えますか」と話を逸らせる。病室は南側に面していて、そこから寛大と実歩が通う保育所が見える。それから、周辺の建物の説明をいつものように繰り返す。「あそこが湖南中で、その手前が商業高校ですよ」

その日、久々に寛大と実歩を迎えに行った。娘の家にも我が家にもインフルエンザの嵐が吹き荒れ、三週間近く、行き来をやめていたのだ。寛大、実歩が生まれて以来、これほど長く会わなかったのは初めてのことだ。

がらがら橋日記

宮森健次

鬼ごっこ

暖かくなるにつれて、どん底に思えた心身の不調からも抜け出したようだ。漠然とは思っていたが、加齢に伴うあれやこれやは、我が身に降りかかってようやく他人事でなくなってくる。

秋、大仕事が終わったと思った途端に腕が上がらなくなった。これが世に言う五十肩か。この年まで何もなかったのだから見逃してもらえるかと思ったが、ぎりぎりでつかまった。痛みが増していく過程では、このまま治らないのではないかと暗い気分にも襲われたが、医者にもかからず、薬もたよらず、ほったらかしにしていたらゆっくりゆっくり治まっていった。

寒さも底の頃、困難な仕事につかまってしまった。見通しがきかず、どうにか打つ手が裏目と出る。毎夜もどかしさから抜け出せない会議に追われる。ぐったりして帰宅し、ずるずるとした気分で寝床に入るものの、今度は不眠にもつかまってしまった。

時間とともに癒えるのは、どんな苦痛も同じらしく、仕事も不眠もゆっくりゆっくりと快方に向かった。最中にはそんな先を描くことなどまったくできなかったが。

この一週間は、ふらつきにつかまっている。わずかなのだが、頭を動かすたびに軽いめまいを覚えるのだ。生活には支障がないので、そのままほったらかしているが、動くたびに律儀にふらっとくるので、どうにも不快でいけない。暗い妄想もよぎるので調べてみたら、これまた加齢に伴いでてくる症状の一つらしい。ほっときゃ治る類いの。ちょっと安心して、

「良性発作性頭位めまい症というらしい。」

と妻に言うと、

「としだね。」

自分に劣らず、あちこち不調を訴える妻に言えるのはそれぐらいのようだ。

「お互いな。」

これは、思うにとどめる。

あれこれつかまるようになったのだ。若いうちは、知らぬうちに逃げ回れていたものを、逃げ足が鈍くなったのを疫病神は見逃さない。でも、ほっときゃ治る程度で勘弁してくれている。とことんいたぶられてしまった友人知人だって少なくないのに。

今年はコロナから逃げ回るような連休になった。逃げ切れるかどうかはわからない。某所の抗体検査によれば、感染者の実際はかなりの数に上るらしいので、もうつかまってしまっていたとしてもおかしくないのだが。

次々現れる鬼たちとつかまったり逃げたりの繰り返し。いつか逃げ切れなくなるまでの。

30代フリーター　やあ、ジイさん。新型コロナウイルス後の世界についてイアン・ブレマーというアメリカの国際政治学者が朝日新聞で「経済活動は世界に広がるグローバル展開から、消費者に近いローカルなものに移行するでしょう」と語っていた（4月27日朝刊）。

年金生活者　「ローカル」という言葉がグローバル化の後退ではなく、さらなる進展を表す言葉として使われている。

　これまでグローバル化とはモノ、カネ、ヒト、情報が国境を越えて大規模に移動することとされてきた。だが、ひと口に「移動」といっても一様ではない。モノとヒトの移動はカネや情報にくらべ格段に手間がかかる。できれば移動なしで済ませたい。パンデミックによる移動制限はその必要性を一気に高めた。

　それを現実のものにする可能性を広げているのが、ＡＩやＩｏＴ（モノのインターネット）、３Ｄプリンターなどの発達に支えられた第４次産業革命だ。たとえばＩｏＴと３Ｄプリンターを組み入れたネットワークができれば、モノやヒトの移動なしに、消費者は居ながらにして欲しいものを手にすることができる。それは移動を必須とする場所の制約を免れている点で、より進化したグローバル化といえる。

30代　ブレマーはその第４次産業革命がコロナ後に「一気に到来します」と言い、「今までとは全く違う世界」を予言している。

年金　そう言いたくなる気持ちは私も同じだ。災厄を革命への助走と考えれば、いま強いられているきつさがいくぶんか和らぐように思えるからだ。

　だが、パンデミックが終わったとき、人びとが真っ先にしたがるのは元の暮らしに戻ることであることも確かだ。それは「一気に到来」にブレーキをかけ、「全く違う世界」への飛躍を阻むはずだ。言い換えれば、「一気に」ではなく「徐々に」、「全く」ではなく「いくぶんか」違う世界が到来するだろう。ただ、そのあとまた新たな未知のウイルスが襲来すれば、「一気に」と「全く」に近い事態が出来するかもしれない。

30代　移動しなくて済むといえば、いまテレワークが広がっている。

年金　テレワークは、興隆期の資本主義、言い換えれば産業資本主義が強いた職住の分離を解体し、両者を再結合する作用をしている。職住の分離を空間的な分離とすれば、労働と余暇の分離は時間的な分離と言うことができる。産業資本主義は労働者を一個所に集め、一斉に一定時間拘束することで成り立った。テレワークはそうした時間的な分離も崩しつつある。

　それを可能にしているのは、ＩＴの進歩であり、資本主義の高度化、より具体的に言えば消費の過剰化、産業のソフト化、資本のグローバル化だ。テレワークによって生産される商品の中にはかなりの割合で過剰な消費、すなわち選択的消費の対象が含まれており、それらはソフト化した産業構造に支えられ、さらにその構造が資本のグローバル化に支えられている。

　これら三様の変化はいずれも分離から再結合への流れを加速している。消費の過剰化とそれに見合った産業のソフト化は、生産と消費の分離をあいまいにしつつある。従来のモノ消費に加えてコト消費が広がっているのはその象徴だ。コト消費は自身の体験の消費である点で生産でもある。３Ｄプリンターによって消費者がそのまま生産者になる未来を予測する専門家もいる。

30代　他方で社会の分断も進んでいる。

年金　資本のグローバル化で国境による分離にほころびが生じ、足もとが揺らいでいる国家は、これまで強固と見られていた政治と社会の分離の揺らぎにも当面している。この分離もまた産業資本主義が必要としたものだ。

　自由とは名ばかりで飢える自由しか持たない労働者を大量に動員するには、地上の不自由を覆い隠す天上の自由が必要だった。地上とは社会であり、天上とは政治を指す。今その両者の間の障壁が、資本主義の高度化にともなう国家から個人への権力の分散によって揺らぎだしている。

　社会の分断はそのあらわれにほかならない。分断のもとになっているイデオロギーの対立は、もとは政治の領域に限られていた。それが社会の領域にまで広がり出した。そこにも政治と社会の境界の不明瞭化を見ることができる。

30代　新型コロナの影響で原油の先物価格が史上初めてマイナスになったと報じられていた。

年金　富の稀少性の縮減が産業の土台部分で進んでいることをそれは示している。

　人類史を支配してきた富の稀少性は、資本主義の高度化とテクノロジーの発達によって加速度的に縮減しつつある。それはまずインターネット上でのもろもろのサービスの低価格化、無料化となってあらわれ、それがリアルな世界に波及しつつある。

　エネルギーはリアルな世界を支える基礎であり、それによってバーチャルな世界も支えられている。原油のマイナス価格はその基礎中の基礎が一時的に稀少性を失い、過剰性に転じたことを示している。それは世界が長期のトレンドとして「脱石油」に向かいつつあること、ただし、産業の停滞によってではなく、発展によってそこに向かっていることを告げている。

ニュース日記　736

中村　礼治

パンデミックが変えるもの